以降、■無し！

共立（三貴子の共立）

月日がめぐり、もうすでに多くの日数がたっているというのに、邪馬台国の朝廷では誰を統治者とすべきか決定に窮していた。

「日御子の後を承けて摂政となるべき御方は、――日御子の長女である弟姫（弟女）御をあって他以外に、誰もいないではないか」

武内宿禰は、困惑の色をうかべながら言った。「近江国風土記逸文」（伊香小江）

系の■弟女（「云鉢苑」〈弟姫〉（年若い姫）参照）

「たしかにその通りです。しかし、乙姫御は、もうすでに室家（夫婦）と為り、男ふたり女ひとりの子を儲けておられるうえ、身重の御身体となっておられて、――――なかなか御承諾下さらないのです」

「そうなのです。それに乙姫御は、『そのような国家の大任を果せるとは思えない』と

申されるのでございます」

大夫達は、口々に言うのだった。

「そんならば、やはり、月読尊にお願いするしかあるまい。皇太子である月読尊に、御父君の後を継いで大王の位に即いていただくわけにはいかないのか」

「そのことに就きましても、私達がこれまで幾たび御勧めいたしたか知れません。しかし、月読尊（伊邪国（宇佐国）を居処とする去来紗別尊）は、『父上の敵を討つまでは、伊邪国（宇佐国）を離れるわけに参いかぬ』

【拘奴国】

とおっしゃるのです」

「そしてまた、月読尊は、『世の人々の信望は、姉上御一身に集まっている。丹上の威徳を、姉上こそが受け継いで、摂政の位へ昇り、人心を慰撫されるのが最もよろしかろう』

と申されて、決して自ら王位に即こうとはなさらないのでございます」

「かといって、末弟の素戔嗚尊に、俺

王となっていただくことは出来ないし、何か妙案はないのか」

「――」

「このように、いつまでも空位のままというわけにはゆかぬ。いやはやどうすべきか。真実、困ったものよ」

米

を墓所におさめた後の

なすところもなく時は流れ

年が改まって二三八年となり、一一一初代神功皇后

とつきとうか十月十日も瞬く間に過ぎ去ってしまった。

「[illegible]開胎もとっくに過ぎたというのに、日の御子は未だお生まれたならないのか」

「いったいいつ御出産になるのだろう。

いつ鶏は鳴くのだ」

「一日も早く、甦[illegible]って、再び我等の上に照り輝いてください」

巻の声が騒がしくなっていった。

倭国中の誰もが、麗しい女王日御子の再来を信じ、心からその日を待ち望んだ。

そして日がたつにつれて、こうした人々の声は大きくなっていった。

全ての心があたかも一つに解けあったかのように熱く熱く燃え上っていくのだった。

「どうか、お立ちになり、第二代目の日の御子となって下さい」

恐らく、伊是理比咩（＝壹與）の妹奈是理比賣が生れたのは、二三八年になってすぐのことだったのであろう。

父（伊香刀美）も母（初代神功皇后の娘）もその誕生を大いに喜んだ。

しかしながら、何と、――――その誕生は、父母の決別を仕立てるきっかけともなった。

「是非にも、母上の跡をお継ぎ下さい」

矢のような嘆願が続いた。

そうしたある日、[illegible]と、天照大日孁尊（＝天照大神）は、月読尊と素戔嗚尊と走俊人伝中の卑彌呼）は、月読尊と素戔嗚尊とを邪馬台国の都の内[illegible]呼び寄せた。

鎧兜に身を包んだ月読尊は、「何事ならん」とばかりに東方の戦線からかけつけてきた。

そして、もうすでに三十九歳ほどとなり、こぶし八つ分の長さに及ぶ鬚髯（あごひげとほおひげ）を生やした素戔嗚尊も、眦を上げ[illegible]体をゆすって姉上の下に参上した。（神代紀上第五段一書第六参照）

＊なお素戔嗚尊は、二〇〇年生れとすると、二三八年に三十九歳だったことになる。

阿姉（神代紀第六段本文）は、男弟達をキッとばかりに見据えると、――――こう切り出した。

「父のみならず母をも失くし、心の内の悲しさは言い表わしようもありません。しかしいつまでも嘆き悲しみ、徒らに日を過ごしていてよいものでしょうか。輝やかしい祖先の血を受けた私達は、当然の[illegible]ながら祖霊の意志を受け継いで、この後国を治めてゆかなければなりません。今日はそのことについて、よく相談したいのです」

月読尊は――やがていつの日にか、後国の

王となるべき重責があり、阿姉にいわれるまでもなく、主のいない倭国の現状を憂えていたので、こう言った。

「はい姉上様。私も、そのことを日夜考えていたところです。どのようにしてこの倭国を治めてゆくのが、最もよろしゅうございましょうか」

↑↑↑末弟ながら素戔嗚尊も、何か大いに期すところがあるのであろう。目を輝やかせ、身を乗り出して、姉の言を待つのだった。

阿姉は、いったい、何を言おうとしておいでなのだろうか、鋭い洞察力を持つ姉の考えは、二人の男弟達にとって常に驚異的であり、到底、うかがい知ることなどできなかった。

それにしても今、月読尊と素戔嗚尊は、ただごとならない気配を感じ、耳をそばだて、姉の口許をじっと凝視した。

姉は、――――やがて、おもむろに口を開いた。

「私達の祖禰（祖先）は、自ら甲冑を身につけ、山川を跋渉し、東国（九州山脈の東側）を征し、西国（九州山脈の西側）を服し、海を押し渡って海北の国〔狗邪韓国〕を切り取るという偉業をなしとげました。（『宋書倭国伝』等参照）

しかし、この倭国は、いまだ王道融泰というわけではありません。南には〔黽唎国〕があり、東には、父王を亡きものとした〔東夷の国〕〔拘奴国〕〔韓国〕、今の中国地方）があります。（第十章〈其の餘の旁国〉の項参照）

さらに、又、狗邪韓国の北方には、辰韓、馬韓、高句麗などがあって、寸刻といえども安閑としているわけにはいきません」（第229図参照）

月読尊と素戔嗚尊は、拳をにぎりしめ、

―先を促すかのように、大きくうなづいた。

ここに、阿姉は、決然としてこう言った。

「私達は、倭国の統治に力を注ぐとともに、いつ襲って来るか知れない外敵に備えた防備をもよく考えていなければなりません。その為に、私は、この倭国を三つに分けたいと思うのです」

コクヨ ケ-20 20×20

「この倭国を三つに分けるのですか」

月読尊は、目を丸くして、おうむ返しに問い返した。あまりにも意外なことと思えたのだった。

「そうです。日に向う我が国「倭国」を、三つに別つのです。

一〈白日別〉（筑紫国、特に後の筑前国）

二〈豊日別〉（豊前・豊後・長門・周防国）

三〈豊日別〉（肥前・肥後・大国（一支国）・対馬国・投馬国（薩摩国））

の一帯）

狗邪韓国・筑後国をも含み直轄地とする一帯であったろうか。建日向日豊久士比泥別ともいう

三つに分割するのが良いでしょう」「神皇正統記」神代〈豊日別〉「古事記」国生み条〈建日向日豊久士比泥別〉参照）

阿姉は、ここでしばし口を噤んだ。

二人の男弟達は、ただ唖然として、あっけにとられているばかりであった。

天照大日孁尊は、言葉を継いでこう言った。

「私達三人は、――これら三つの国々の、それぞれの統治者となるのです。白日別は、

983ページ

大陸に最も近く、倭国の門戸ともいうべき重要なところであって、備えを疎かにしてはなりません。素戔嗚尊、あなたが白日別の主となるがよい。貴方はこれよりの一大率とも主とも呼ばれることになるのです」

阿姉は、威厳をもって素戔嗚尊に命じた。

「はい、分かりました」

素戔嗚尊は、その勢いに圧倒されて服従した。

とはいえ、素戔嗚尊はやがて胸の内に穏やかならない暗鬱なものがうごめくのを感じた。

素戔嗚尊は、内心、こう思うのだった。

白日別は倭国本土北端の小さな地域でしかない。大陸への備えの為と姉上は云われるが、狗邪韓国を奪って、さらに海を渡り、白日別の地へ敵勢が押し寄せてくるなどという事態は、まずあり得ないことだ。

姉上は、この私を末弟だからといってないがしろにしておられるのだ。

なるほど、倭国の慣例からいえば、長男でない以上、止むを得ないことであった。

どうしようもないことであった。

よしとせねばなるまい。

素戔嗚尊は、必死に自分自身の心を押えつけ、納得させようと務めた。しかし、末っ子素戔嗚尊には、姉に対する一種の甘えがあった。

この蟻酒屈した憤満が、これから後執拗につきまとって、素戔嗚尊を異常なばかりに狂暴な行動へとかりたてゆく。

「月読尊よ。あなたは豊日別の『主』となり、『大空』として、東域で立ちはだかる『拘奴国』の動向に対処するがよい。いつか必ず決着をつけることになるでしょうが、でも、今はまだその機運が熟しておりません。

国の存亡をかけての戦いに備え、ゆめゆめ怠りのないよう、心して守りに徹するのです」

月読尊は、東方の強敵を眼のあたりに思い浮かべただけで、むらむらと沸き上がる敵愾心を覚え、武者振るいしたかのようだった。

こうして、月読尊は、宇佐を中心とする広大な豊日別の国を掌握することになった。

天照大日霊尊は、さらに続けてこう言った。

「私は、豊日別『建日向日豊久士比泥別』を統治することにしたいと思います。

また私は、この南の奴国・邪馬台国・女王国（八女土国）に都しているし、白日別・豊日別・豊日別の倭国三国の力を、総結集する重鎮としての任をも兼ねることにいたしましょう。三人の心がバラバラに離れてしまったならば、倭国の真の威力を発揮することはできません。三つの力は、緊密に結びつかりと連繋がとられ、一つの大きな力に結束されなければならないのです。

となるように倭国は、いずれ、東方の拘奴国ロを平らげ、南の狗奴国ロをも従わせることになりましょう。その時の高下――二人共、それぞれの任務に励まれるがよいし

こうして、日御子（卑弥呼・大日霊貴・天照大日霊尊・天照大神・天御中主尊）は、倭国の中核というべき高天原（タクマガ原・託麻ガ原）に都を置いて治すこととされた。

つまり、日御子（卑弥呼）は、

「母（初代天照大神・初代神功皇后）の名と年と地位とを受け継ごう」

と心をお定めになった。

すなわち、日御子は、二代目の神功皇后として、倭国の中心的な役割りを担うことにされた。

日御子は、光うるわしく輝いて、天地四方に照りとおるばかりに美しかった。

さらに日御子は、当時の人々を恐懼させずにはおかない、あやしいばかりの霊異な能力を持っておいでになった。

その日の御子が、ついに、倭国の女王として立とうと決心されたのである。

倭国中が、沸きに沸き、狂喜したことは、いうまでもないことであった。

＊

次頁から

こうしたわけで、天女の弟女は、天羽衣を捜し取り、着て、宮中へ昇ることになった。

（「近江国風土記逸文」（伊香小江）条参照）

仲哀天皇の皇后としての地位と年齢と名を受け継ぐ儀式によって、第二代目の神功皇后となった女王日御子（卑弥呼）は、

倭国（北九州・山口・狗邪韓国一帯の国）の頂点に立つ摂政として君臨することとなり、その威光は倭国中に輝き渡った。

魏志倭人伝に、あまねく

「乃ち共に一女子を立てて王と為す。名づけて卑弥呼と曰う。鬼道に事え、能く衆を惑

H30(2018)2.9(金)〜2.10(土)(4回)
H30(2018)12.15(日)〜12.17(土)(4回)
令和元(2019)5.17(金)〜5.18(土)(3回)

F 5/18
5/17

九土記457 ㊐978

987

魏志倭48 「ところで」 ㊐961 2/2

魏志倭48 ㊐969 2/2 ㊐1030

魏志倭48 ㊐999 周防

めす。年已に長大なるも、夫壻無く、男弟有り、佐けて國を治む。王と爲りしより以来、見る有る者少なく、婢千人を以って自ら侍せしむ。唯男子一人(武内宿禰のことであろうか)有り、飲食を給し、辞を伝え居處に出入す。宮室・楼観・城柵厳かに設け、常に人有り、兵を持して守衛す」

と記されている。

まさしくその通りだったのであろう。

ところで「二代目の御子は、仲哀天皇の皇后として摂政の位につかれたのだから、当然、のことながら、夫壻があってはならないわけであった。(「魏志倭人伝」参照)

伊香刀美と弟せとの縁は無情にも完全に断ち切られた。

伊香刀美(中臣烏賊津使主)は、独り空しき床を守って唆詠(歎く意)し、断むことがなかったという。(「近江国風土記逸文」へ伊香小江〈糸参照〉)

夫はおっと。壻はムコ

168

㊐962 1/3 5分

コクヨ ケ-20 20×20

高千穂山峯

■さて、日御子が母の名と年と地位とを受け継いで二代目の神功皇后となられてから数日の後、旅支度を整えた男弟二人は、姉日御子に見えた。

「それでは、これより罷ります。姉上もお達者でお過ごしください」

「そなた達も、道中気をつけて行かれるがよい」

満足げに、日御子は二人の弟たちを見送るのだった。

■それぞれの□主□（一大率）に従う供人達の長い長い列が、砂ぼこりを上げながら延延と続き、次第に遠ざかっていった。

■月読尊は、白川に沿う上り坂の道を東へと進み、やがて上り坂の道が続いて、――――やがて立野あたりの狭隘な地に到った。そこは阿蘇の外輪山の切欠部に位置している。（第図参照）

■阿蘇山は、神秘的な山である。

・中央部に高岳・中岳・杵島岳・烏帽子岳・根子岳の、所謂□五岳□が峙つ。（第234図（阿蘇五岳）参照）

989P－1/5

次頁から

常に黒煙りを吐き、時に火柱を天に向って噴き上げる中岳の山体は、熔岩および集塊岩の累層より成る。（「地名辞典」太田為三郎、名著出版〈阿蘇山〉参照）

● 五岳の北側には『阿蘇谷』、南側には『南郷谷』があり、この二つの谷は西方でつながっている。

■ そして、五岳・阿蘇谷・南郷谷をぐるりと取り囲むようにして、内側が鋭く切り立ち、外側が緩慢な『外輪山』が連らなっている。

● つまり、火を噴く『中岳』を中心として、高い千ほどもの山々から成る阿蘇の『外輪山』が高く低く連らなり、囲繞する形をなしている。

■ あるいはこの当時、阿蘇の外輪山は、『高千穂の峯』と呼ばれていたのかも知れない。

● 阿蘇の外輪山は、まさしく〈高い千ほどもの山々の連らなる峯〉という形容がぴったりの連山である。

コクヨ ケ－20 20×20

前頁に

■ ここに付言すると、現在、阿蘇の外輪山の南の稜線一帯は、□高千穂野□と称されている。（五万分の一地図〈高森〉。第12図参照）

●もしかしたら、□高千穂野□とは、もともと〈高千穂の山峯の野〉という意味であったものが、長年月の間に訛ったのではなかろうか。（「荒筋」第二編『天孫降臨』参照）

●そして、ようするに、〈その昔、阿蘇の外輪山が□蘇の高千穂山峯□と呼称されていたことの□名残□として……□高千穂野□という呼び名が、今に至る迄も伝えられてきた〉

■ ということなのかも知れない。

■ また、たぶん倭人達は、――江南の風習そのままに、□襲□に□阿□を冠して、□阿蘇山□と呼んだのであろう、と思われる。（第八章〈田道間守〉の項、□阿□参照）

●神代紀（下）第九段本文には、

□日向の襲の高千穂山峯□

とある。

●〈日向（九州）の襲（阿蘇）の高千穂山峯（高い千もの山々の連らなる山峯）〉

（第4巻）171

自習帯⑧-49~50

989-3/5

「其の余の諸国」の項の中に「拘奴国」を設けた。

872

という意味なのであろう。（第十章「其の餘の諸国」の項の中に「拘奴国」において既述）

■宮崎県北部の「高千穂」は、阿蘇外輪山の東南の裾野にあって、その高千穂峡から、雄大な阿蘇の外輪山を間近に見ることができる。

●「高千穂峰」（阿蘇の外輪山）の山麓の処々から流れ下る川（五カ瀬川）の峡谷だから、「高千穂峡」と名付けられたのだろうと想像される（五万分の一地図参照）。

■ではつぎに、宮崎県と鹿児島県とにまたがる「霧島火山群」の方の概略の様子を見てみよう。

●霧島火山群は、旧・新噴出時期を異にする大小二十三の活火山の集合である。多種多様な火山地形が狭い区域に集積している点は、他にその類例をみない。

●最高峰の韓国岳（一七〇〇メートル）は西岳ある

172

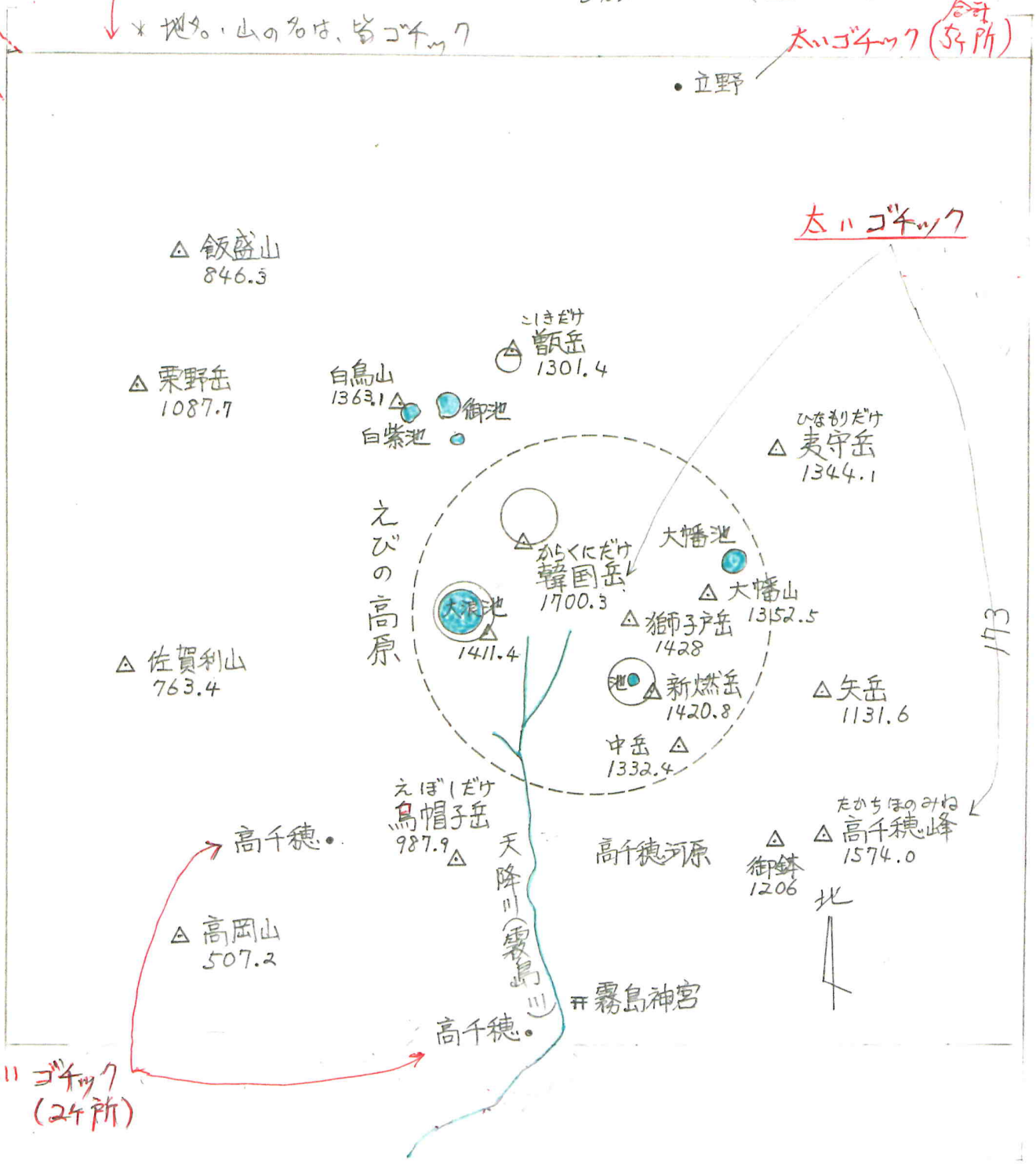
・右頁全面に　大きく掲載下さい。
・カラー
・この範囲全部、第二巻5頁、山部分と同じ色にして下さい。
　＊池と川は、ブルーにしたい。
　＊地名・山の名は、皆ゴチック

5万分の1地図に、△点つきとある。

枠不要

・右頁に、大きく掲載下さい。
・上方に大きくはみ出させてほしい。

989P_4/5



太いゴチック（2ヶ所）

140G　第232図　韓国岳を中心とする霧島の山々

120G

昭和59年4月30日付、国土地理院発行の5万分の1地図「霧島山」。他参照。

第1巻(1)-93頁「霧島山」　天降川　高千穂河原　5万分の1地図　高千穂河原　霧島神宮　小町60°

＊5万分の1地図×0.5倍の図は「はなはだ」不適切ファンシーとある。

989P 5/5

カット

・カラー
・左頁の上半分に、左右限度一杯はみ出し大きく掲載下さい。

140G 第233図 霧島の韓国岳・高千穂峰およびその周辺（鳥瞰図）

13GG 『地図でめぐる神社とお寺』武光誠、帝国書院、平成24年7月12日発行、158頁参照。

阿蘇噴火 ㊐ 2614P-3/2 写真

990P－1/5

・カラー
・右頁の上半分に大きく掲載下さい。

140G 写真図版 205 山いくちかいら 16号 ん もえだけ 新燃岳の方から、東南方向に そび 聳える『たかちほのみね 高千穂峰』を のぞ 望む

130G 『鹿児島県の山』山と渓谷社 175 2005年9月1日発行 11頁参照。

いは西霧島とも呼ばれ、これに次ぐ高千穂峰（一五七四メートル）は東岳または東霧島といわれる。

• 両者は噴出時期の旧・新代表であるとともに、火山型も相異なる代表である。

• 韓国岳は旧期火山に共通する扁平な山容と大火口とを有する。

• 高千穂峰は新期噴出火山の代表で火山破砕物および溶岩の累層よりなり円錐丘をなす。（「世界大百科事典」平凡社、霧島屋久国立公園〈参照〉）

• ここにおいて「明瞭でないが、」霧島火山群と、阿蘇山とを、次のように対比して考えてみたい。

【中央部】

• 霧島では、最高峰韓国岳（一七〇〇メートル）を主峰とする獅子戸岳（一四二八メートル）・新燃岳（一四二一メートル）・大浪池（一四一一メートル）・中岳（一三三二メートル）等が、ひと続きの山塊状をなしている、といえよう。

• 一方、阿蘇では、最高峰高岳（一五九二メートル）を中心とする五岳が、ひと続きの山塊

状を呈している。

【周辺部】

●霧島では、「韓国岳」のまわりに、次のような山々が実在している。

①東に、「高千穂峰」（一五七四㍍）・「矢岳」（一三二㍍）・「夷守岳」（一三四四㍍）・「丸岡岳」。「龍王岳」等がある。

②北に、「甑岳」（一三〇一㍍）・「白鳥山」（一三六三㍍）・「飯盛山」（八四六㍍）等が有る。

③西に、「栗野岳」（一〇八八㍍）・「佐賀利山」（七六三㍍）。「鉾立山」等が有る。

④南に、「烏帽子岳」（九八八㍍）・「高岡山」（五〇七㍍）。「焼地岳」等が有る。

以上、「帝国地名辞典」太田為三郎、名著出版、〈霧島山〉。五万分の一地図。等参照

●もしかしたらその昔、これらの外周縁部の山々を総称して、「高千穂峰」と称していたのかも知れない。

たての㊥988ページ　エアリアマップ（緑の背、赤表紙）鹿児島県地図に「立野」が有る。　うちうみ元193ページ　内海＝入海　ダイナミック！989ページ-2/3 10行　990ページ-4/5

高千穂

何とも意外なことに、現在の「高千穂峰」から西方九キロ、及び西南六・五キロ離れた二ヶ所に「高千穂」という地名が見られる。

(1) 烏帽子岳の西麓、

(2) 烏帽子岳の南麓

の二ヶ所である。（昭和五十年四月三十日付、国土地理院発行の五万分の一地図。第232図参照）

いうまでもなく最高峰「韓国岳」を囲む山々のうち、特に「高千穂峰」は有名である。――しかしその他に二ヶ所の「高千穂」という地名があって、興味深いものがある。

・詳らかでないが、この二ヶ所の「高千穂」は、韓国岳を取り囲む周辺一帯が「高千穂」と呼ばれていた往古の情況を、断片的ながら現代へ伝えているようにも思われる。

立野

内海

(1) 霧島では、最高峰「韓国岳」の北方約九キロの所に、「立野」という地名がある。（第232図参照）

一方、阿蘇では、最高峰「高岳」の西方約十二キロの所に、「立野」という地名がある。（第232図参照）

・両方共、邪馬台国の都（合志）に近い位置に「立野」があり、それより遠い所に最高峰（韓国岳およびたかだけ）をはじめとする山々が

コクヨ　ケ-20　20×20

17行 一方とダブル　様子 ㊥989ページ 14行　新代(1)-96参　㊥989ページ-4/5 地図　5万分の1地図　ことの　エアリアマップ 鹿児島・宮崎 新詳高等地図65ページ

「阿蘇山を霧島山に擬え」とあると変である！

990P－5/5

エリアマップ 鹿児島県地図（緑の省、市街地）

位置 別頁19行

・天降川の支流に霧島川がある。

改行

ある、といえよう。

・つまり、〈邪馬台国の都（合志）を中心として、阿蘇の地形を時計回りに九〇度回転させ小形化したものが□霧島□である〉と見做せそうである。

■もっとも、内海の□有明海□を、同じく内海の□鹿児島湾□に見立て、また□白川□を□天降川□（霧島川）に見立てると、阿蘇の□高千穂野□が、霧島の□高千穂峰□と、配置的に合致する。

・とすれば、阿蘇谷は、えびの高原に相当する。

・なるほど、霧島火山群の山々は「点在している」といった印象が強いものの、それでも倭人達は、九州南半部を統治下に置いた時、

ダイナミック地形図

〈阿蘇山と、霧島山とを対比してみずにはおれなかったのだろう〉

と推察される。（第12図および第232図参照）

なんの参考にも述べるにとどめたい。

■なお、霧島山を阿蘇山に擬らえ、――――霧島山の東南方の志布志湾（有明湾とも有明海とも言う）を有明海に見立てた人がいたのかも知れない。（「広辞苑」広12P）

⊕989P－4/5の図

コクヨ ケ－20 20×20

紀元節雪とそびゆる思い出 愛国行進曲 ㊤3729P 12P

991P-1/5

根子岳 ㊤988P 新行 ㊤989P-1/2 6行

大カンク79P

〈有明湾〉。「帝国地名辞典」太田為三郎、名著出版〈有明浦〉参照

■阿蘇谷を行く月読尊の隊列の左手には、はぼ同じ高さで連らなる高千穂の峯々（外輪山の北縁部）があり、――左手には、大空に向かって黒い煙を吐き続けている中岳や、頂上部がギザギザ（㊤988P）した根子岳などの「五岳」があった。（第234図参照）

■阿蘇の中岳は、時として、

●「虹」のような〈紅色〉の火柱を天高く噴き上げ、

●異常なばかりの「黒煙」や「白い水蒸気」をたち昇らせ、

●「蝿」のような〈灰〉を降らせ、

●「鼓」のような地鳴りを発し、激しい「地震」を引き起こす。（第七十一章において詳述したい）

■しかしくいまは何事もなくかえって不気味とも思えるほど穏やかであった。

■やがて、阿蘇谷は突然尽きて、雲に接える

・右頁上半分に掲載下さい。

991P－2/5

同図
㊐3753P－3/5

他よりも
小さい△形にたい。
（小さい山だから）

米塚
△954m

㊐991P－4/5

きしま
杵島岳
△1321m

くさせんりはま
草千里ヶ浜（千里ヶ浜）

えぼしだけ
烏帽子岳
△1337m

さんぢょう
山上神社
⛩

ふんかこう
噴火口

なかだけ
中岳
△1510m

たかだけ
高岳
△1592m

北

ねこだけ
根子岳（猫岳）
△1408m

14QG 第234図 あそごがく 阿蘇五岳（根子岳・高岳・中岳・杵島岳・烏帽子岳を阿蘇五岳という）

小さい字

13QG 昭和42年3月30日付 国土地理院発行の5万分之1地図「阿蘇山」。
『阿蘇くじゅう国立公園』毎日新聞社 1993年3月15日発行 74頁。他参照。

千里ヶ浜 5万分之1地図 阿蘇山
草千里ヶ浜「熊本県の山」27頁
（千枝ちの本）

中岳1510m「阿蘇くじゅう国立公園」74頁

991 P3/5

カット ←

・カラー

・左頁の上半分に掲載する。↑

・右をカットしないで下さい

↑カット

14QG

写真図版 206　阿蘇の草千里ヶ浜から、中岳の噴煙・高岳を望む

13QG

『熊本』日本の山河(5)天と地の旅、国書刊行会、昭和51年12月20日発行、89頁参照。

12QG

・根子岳は、高岳に隠れていて、見えない。　182

喫煙がなくて、ちょっぴり寂しい！ 交換すること　991『－4/5

・カラー
右頁の上半分に載せる。

・左右をカットしないで下さい。
・上、下は適宜カット可。

14QG
13QG
写真図版207　阿蘇外輪山の大観峰（展望台）から、『阿蘇五岳』を望遠する
『阿蘇くじゅう国立公園』毎日新聞社、1993年3月15日発行、32頁参照。

高千穂峰（外輪山）の急な崖が、行く手を阻むかのように立ち塞いだ。

■この高く嶮しい峻壁上の月読尊の一行は、一列に連らなり、えいえいとよじ登っていった。

ふり返ると、眼下には、阿蘇の盆地が広がっており、――かなたに噴煙をたなびかせている雄渾な山容の五岳があった。

そーーついに、月読尊は高千穂峰の頂きに到った。

■ここに、視界が突如開けて、眺望が一変した。

高千穂■峰（外輪山）の東方には、うねうねと、なだらかな起伏を見せて下る波野の草原があり、――東北の方角には、『槵觸の二上峰』九重の二上峰、つまり久住山（一七八七メートル）と、大船山（一七八七メートル）の二つの山塊があった。

『倭国第一の高峰』の秀麗な姿は筆舌につくしがたく、天に聳え立つその様はおごそかな気を漂わせていた。

■これから、月読尊は――日向（倭国）の襲（阿蘇）の高千穂（外輪山）の槵日（奇霊）の二上峰のふもとの荒野を通って、東国『伊

タイトル

一大率 須佐 ㊥995P　そつ　聚大集 47P　感慨 紀284P　紀(巻)91P 新　㊥872P タイトル㊥870P　992P　紀(巻)91P　韓国=拘奴国 ㊥871P　まが 罷ります　㊥988P 6行　八女土 ㊥830P-2/2 ″758P

紀上 140P 末5行

さのくに
邪国（宇佐国）へ赴くのである。

「倭国の女王・姉上が治められる邪馬台国（八女土国）ともしばらくお別れだ。光うわしくして、国のうちに照り徹るばかりの姉上『日の御子』よ、いざ、おいとまつかまります。

私は、《高千穂の山々》や《槵觸の二上峯》をはさんで反対側にある夜の国・豊日別の国へ罷り、日に配びて、その夜の国をば治めましょう。そして、東の一海のかなたの韓国（拘奴国）との攻防に、尽力限りを尽すこと致します」

紀上 140P 末5行

尚、古事記の天孫降臨条に、

「ここ（高千穂）は韓国に向かひ、云々」

とある。（第十章『拘奴国』において既述）

●都からやってきた人々は、外輪山山頂に到った時《韓国（拘奴国）に向かっている》という感慨をいだいたのであろう。

一大率・月読尊

高千穂峯（外輪山）の山上に立つ月読尊は

紀 15P 末3行

神代紀下 九段書 第四参照

紀 86P 末3行

紀 87P 上の方

紀 13P

紀 329P

元 1548P

元 758P

元 484P

元 30P

紀上 140P 末5行

タイトル㊥870P ㊥872P　前頁16行つくりかた　185　ルビ無し

㊥ ヨ ケ-20 20×20

姉「日御子」の御座す タクマカ原の都の方角を じっと見つめ 別れを惜んでいたが……や かて厳しい目をあげると、倭国の国運をかけての自らの務めを果たす為 一路、東を目指した■行けども行けども 火山灰の降り積った荒野が 只だらだらと広がっていた。

■月読尊の一行は、高千穂■の峯から、棲鶴の山裾へと到り、さらに、夏の日ざしに滑り落ちる汗を振り払いながら押し進んでいった。

■脊実の空国（荒れてやせた不毛の土地）を 北上して

頓丘から国覓ぎ行去り（ずっと丘つづきの所を通ってよい国を求めて）で九州東岸の己百支国（頑田国＝大分）へ到った後 伊邪国（宇佐国）へと急いだ。

■豊日別の道の両側には青田が広がっていて、実り豊かな秋を約束するかのように そよ風に■稲の葉がさやさやとなびいていた。

■先ぶれがすでに行き渡っているのだろう。行く道々に熱狂的な歓迎の声がどよめいた。

伊邪国へ近づくにつれていよいよ黒山

のような人垣が出来、月読尊の後方にはおびただしい人々の列が続いた。

「若君だ。若君の御一行がお通りだ」

東人達は、本来なら倭王であるべき筈のこの一大率（かつての倭王）の帰還を、その目で確かめて安堵し、心から喜び合った。

こうして――――いずれ王位に即き、倭王として君臨すべき皇太子『月読尊』（川去來紗別尊、譽田別皇子）は、「神風の伊邪国」（宇佐国）に居住して、九州山脈の東側の国々及び長門、周防の地域一帯を治めることとなった。

なお、因みに述べると、「宇佐神宮の神域を流れる川『寄藻川』は『月瀬川』とも称されており、『八雲御抄』の河の部に、この『月瀬川』の記載がある」という。（宇佐神宮の冊子参照）

・『月瀬川』とは、『月読尊』にちなんだ名であったのかも知れない。

＊

一大率・素戔嗚尊

■邪馬台国の都から北方へ■続く道を行く

一方、道を北にとった素戔嗚尊の一行は、北の奴国（儺縣・那津・今の那珂郡博多付近）を経て、父と母とを祀る「香椎宮」へと向かいたのではなかろうか。

●筑前国風土記逸文に、「筑紫の国に到れば、例に先ず賀襲の宮に参謁ブ」とある。（『風土記』日本古典文学大系、岩波書店、五〇二頁参照）

■素戔嗚尊は、そのの ち伊都国の「主」（爾支）となり、「海」（宇美国）を含む九州北端（筑前国一帯）を統轄する最高機関「一大率」として、絶大な力をふるったのであろう、と推察される。

■なお、時期的にいえば、数年後の頃のことと思われるが、――「一大率」について、魏

志倭人伝に次のように記されている。

「女王国（邪馬台国）より以北には、特に一大率を置き、諸国を検察せしむ。諸国えを畏憚す。常に伊都国に治す。国中に於いて刺史の如き有り。王、使を遣わして京都（洛陽）・帯方郡・諸韓国に詣り、及び郡（帯方郡）の倭国に使するや、皆津に臨みて捜露し、文書・賜遺の物を伝送して女王に詣らしめ、差錯するを得ず」

漢武帝の元封五年（前一〇六）に始めて置かれた地方官。州の長官。大守。前漢・唐時代

こう

とある。

一大率は、このように大きな権限を持っていたのだった。

この物語では、

女王国より以北の「伊邪国」（宇佐国）および「伊都国」において、月読尊と素戔嗚尊がそれぞれ「一大率」となり、諸国を検察したのであろう

と考えてみたい。

素戔嗚尊は、武勇に勝れ、勇敢であった。しかし反面、残忍な性格であったという。（記紀参照）

もしかしたら、素戔嗚尊は、東国の拘奴国を相手として戦う総帥になりたかったのであろうか。いうまでもなく、そうしたことの詳細は全く定かでないが、――――何かしら不満を抱いていたようである。

そして、その鬱積した不満は、次第に、堪え難いものとなっていった。

「あの時、姉と兄とは、この吾をないがしろにし、韓山に向かっているこんなに小さな国しかくれなかった。俺の力をためす機会さえないではないか」

とも恨めしいことよ

己の力を過信する素戔嗚尊は、押えようもない苛立たしさを覚えるのだった。

悔しさはつのり、胸先に達するほどの八拳須（ミぶし八つ分の長さの須）をたくわえた

大男が、いつも泣きじゃくったり、怒ってはかりいるといった有様であった。

●むやみやたらに当り散らし、誰彼の別も無く大声を張りあげて罵倒し、時としてひどく残酷だった。

●しかしながら、素戔嗚尊に仕える者達にとってはなす術がなかった。

●その妻まじい激しさに、身ぶるいしながら、じっと耐えるほかなかった。

■こうして素戔嗚尊が、命ぜられた国を治らさずーして、八拳髭を打ち震わせ、泣きわめくものだから、《青山が枯山になるのではなかろうか》とさえ思われた。

■もはや天下は治まらず、ーーーー韓山に向かう伊都国で、一大暴風素戔嗚尊は、ただ勝手気ままに、非情の限りをつくし、あたら無為の日々を送るのだった。

米

H24.1.19
H30(2018)2.10(土)～2.13(4回)
H30(2018)12.17(月)～12.18(3回)
令和2(2020)8.23(日)～8.24(4回)

8/24 1下 8/24 8/23

タイトル ⊞976 P1/2
訳文 ⊞986 P3/2末～ 魏志倭人伝 48行
同文 三者共立 ⊞986 P3/2 14行～

999P.

■ ともあれ、魏志倭人伝が、「乃ち共に一女子を立てて王と為す。名づけて卑彌呼と曰う。鬼道に事え、能く衆を惑わす。年已に長大なるも、夫壻無く、男弟有り、佐けて國を治む。云々」と記すとおりの「共立」の時代になったのであろう。（第十二章〈共立〉の項において既述）

■ すなわち、

① 九州山脈の西方の肥国（肥前・肥後）を中心とする地域を、天照大神が治め、

② 九州山脈の東方の豊国（豊前・豊後）及び長門・周防に至る地域を、月読尊が治め、

③ そして、不彌国（宇美）・北の奴国・伊都国から韓山に向かう一帯を、素戔嗚尊が治めた、

等々の

ということであろう、と推察される。（既述）

*

コクヨ ケ-20 20×20